

QR Newsletter



第四紀通信

Vol. 17 No.3, 2010



長野県飯田市竹佐中原遺跡の調査風景。ここは捏造事件後最初に調査された後期旧石器時代を遡る可能性のある遺跡で、その重要性から地形、火山灰、土壌、年代測定および植物珪酸体などを駆使した総合的な自然科学分析がなされている。(2005年7月12日 佐藤宏之撮影)

Vol. 17 No. 3

June 1, 2010

2010年大会案内・・・・・・・・・・2	INQUA 大会開催案内・・・・・・・・12
学会賞・学術賞受賞者講演会案内・・5	INQUA 顕彰者募集案内・・・・・・・・13
シンポジウム案内・・・・・・・・・・5	テフラ・火山研究委員会
講習会参加報告・・・・・・・・・・7	ワークショップ報告・・・・・・・・13
講習会案内・・・・・・・・・・8	国際環境考古学会開催案内・・・・14
国立環境研究所	粘土学会討論会案内・・・・・・・・14
公開シンポジウム案内・・・・・・8	PAGES Asia 2K Workshop
法務委員会規定・・・・・・・・・・9	開催案内・・・・・・・・・・15
幹事会議事録・・・・・・・・・・10	学生会員継続届・・・・・・・・・・15
北淡国際活断層	会員消息・・・・・・・・・・16
シンポジウム報告・・・・・・・・10	

◆日本第四紀学会 2010年大会案内（第3報）

大会の概要

日本第四紀学会 2010年大会は以下の予定で開催されますので、多数の皆さんのご参加をお願いいたします。

1. 日時・開催場所：2010年8月20日（金）～8月22日（日）

東京学芸大学（東京都小金井市貫井北町4-1-1）<http://www.u-gakugei.ac.jp/>
東京学芸大学芸術館ホールほか

2. 日程

8月20日 一般研究発表（口頭およびポスター）・評議員会
8月21日 一般研究発表（口頭およびポスター）・総会・懇親会
8月22日 午前：学会賞・学術賞受賞者講演会（受賞講演者は決定後ホームページ等でお知らせします）、午後：シンポジウム
8月23日 巡検（日帰り）

3. 発表の申し込み

前号でお知らせしましたとおり、一般研究発表（口頭およびポスター）ならびにシンポジウムのポスターサロン参加申し込み締め切りは2010年6月10日（木）となっています。前号の＜発表の申し込み＞を参照の上、

- ・一般発表の場合は、①発表申込書（指定メールアドレスあて、または郵送）と②講演要旨原稿（行事幹事へ郵送）を、
 - ・ポスターサロン出展の場合は③ポスターサロン申込書（指定メールアドレスあて、または郵送）を、
- それぞれお送りください。

4. 参加費・懇親会申し込み等

- 大会参加費として、会員・非会員を問わず2,000円を申し受けます。当日会場の受付にてお支払いください。ただし、70歳以上の会員と学部学生、シンポジウム依頼講演者は無料です。
- 講演要旨集は、会場で直接販売いたします。
- 懇親会に参加される方は、人数を把握するために、予約の申し込みをお願いします。
日時：8月21日（土）18：00～（予定）
会場：東京学芸大学第2むさしのホール
参加費：一般 5,000円（予約）、（当日は6,000円）、学生 2,500円
予約：8月10日（火）までに、電子メールまたはFaxで大会実行委員会事務局和田までご連絡ください。 E-mail：ulmusdav(at)u-gakugei.ac.jp Fax：042-329-7874

5. シンポジウム「自然史の教育と研究をすすめるために－さまざまな分野からの取り組み」

趣旨：自然史学の一分野といえる第四紀学にとって、自然史教育のあり方を考えることは重要である。これまで、学校教育現場における地学、地理の履修者の減少の問題が多く取りあげられてきたが、一方で生涯教育の現場や各地域で第四紀学の成果を踏まえた活発な自然史教育や普及活動が進められている。このシンポジウムでは、それらの特色ある活動をされている方に報告していただく。第四紀学の成果をどう展開し、いかに社会に発信していくか、そして、これからの自然史教育をどうすすめていくか議論する。

日時：2010年8月22日（日）13：00～18：00

場所：東京学芸大学芸術館ホール

世話人：小泉武栄（東京学芸大）・目代邦康（自然保護助成基金）・関 秀明（古今書院）・辻村千尋（自然保護協会）・植木岳雪（産総研）・久保純子（早稲田大）

プログラム（予定）

13:00-13:05 趣旨説明（目代邦康）

第1部 自然史研究の視点

- 13:05-13:20 自然史教育の方法と対象 植木岳雪（産総研）
 13:20-13:45 カタクリとシデコブシを用いた自然史教育 小泉武栄（東京学芸大）
 13:45-14:10 分布様式としての関越要素の存在について 牧林 功（埼玉昆虫談話会）
 14:10-14:35 さいはての島における自然史ネットワーク 佐藤雅彦（利尻町立博物館）
 14:35-15:00 ジオパーク活動に第四紀研究の果たす役割 町田 洋（日本第四紀学会 前会長）

第2部 自然史教育の様々な方法

- 15:15-15:30 児童・生徒向けの防災教育（講演者調整中）
 15:30-15:45 土をどう教えるか 浅野真希（筑波大）
 15:45-16:00 郷土の自然と歴史ー普及と教材化ー 角田清美（都立北多摩高校）
 16:00-16:15 地形実験を取り入れた自然史教育 池田 宏（深田地質研究所・元筑波大）
 16:15-16:30 岩宿博物館の普及活動（仮題） 小菅将夫（みどり市立岩宿博物館）

16:30-17:00 総合討論

17:00-18:00 ポスターサロン（情報交換会）

会場では、地産地消に取り組む山梨県小菅村と東京学芸大学環境教育実践施設による地ビールなどの飲み物も販売します。ビール片手に活発な議論と情報交換をしていただきたいと思います。ポスターサロン出展申し込みは上記3. をご覧ください。

6. 巡検「里山景観の違いを探るー地生態学の視点からー」

趣旨：関東平野西縁部の里山景観は地域ごとに特性がみられる。今回の巡検では秋留台地、加住丘陵、五日市丘陵の里山景観の地域特性について、植生・地形・地質といった自然環境要素や、それらに基づく人間の生活様式・生産活動、歴史などを包括的に観察し、その関連性（成立要因）について考察する。

日程：8月23日（月）日帰り

案内者：増沢有葉（科学技術振興機構）・小泉武栄（東京学芸大学）・辻村千尋（日本自然保護協会）

巡検の概要とスケジュール：

- 9:00 JR 五日市線東秋留駅集合（8:44 拝島駅発武蔵五日市駅行きに乗って下さい）
 ・二宮神社（台地上の湧水）
 ・前田耕地遺跡（縄文草創期～平安時代の台地上の水田遺跡）
 ・秋川の霞堤
 ・加住丘陵切欠地区（礫層からなる里山；カタクリの分布する沖積錐）
 ・五日市丘陵横沢入地区（第三系頁岩からなる里山；水気の多い谷津田環境）
 16:00 頃 JR 五日市線武蔵増戸駅解散

移動は、徒歩と電車です。途中、店はありませんので、昼食は持参してください。
 天候および交通事情等により若干の変更もあります。

募集人員：30名程度（10名未満の場合は中止）

参加費：500円（資料代と保険代。電車代や昼食代は各自ご負担下さい）

申し込み方法：参加希望者は、E-mailにて、氏名・所属・連絡先（住所・電話・メールアドレス）、定員オーバーの場合のキャンセル待ち希望の有無をご連絡ください。先着順に受け付けます。なお、電話やFAXでの申し込みは受け付けません。定員に達し次第、受付終了とさせていただきます。

申し込み先：tsujimura(at)nacsj.or.jp（財）日本自然保護協会 辻村千尋

- ・受付後に個別に案内等を送付します。
- ・参加の確認と参加費の徴収および巡検資料の受け渡しは、学会期間中に巡検コーナーを設けて行う予定です。
- ・巡検のみ参加される方は、申し込み時にその旨をお書き添えください。

申し込み締め切り：7月30日（金）18時

7. 申し込み締め切りなどの日程

一般発表申し込み締め切り：2010年6月10日（木）、申込書を指定メールアドレスへ

一般発表講演要旨郵送締め切り：2010年6月10日（木）、講演要旨を行事担当幹事（久保純子）あて郵送

シンポジウムポスターサロン申し込み締め切り：2010年6月10日（木）、申込書を指定メールアドレスへ

巡検参加申し込み締め切り：2010年7月30日（金）18時、上記6. 参照

懇親会の予約締め切り：2010年8月10日（火）18時、上記4. 参照

8. 大会実行委員会

実行委員会委員長 小泉武栄

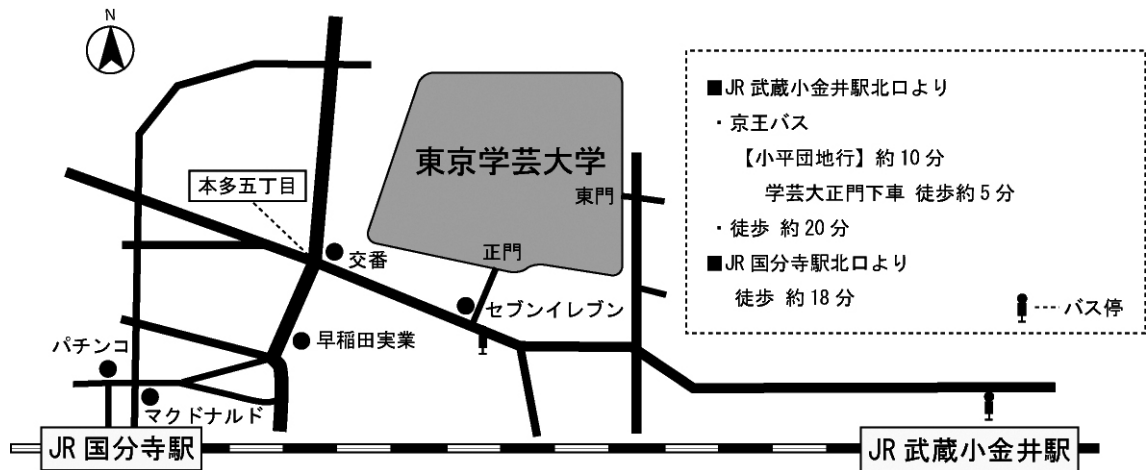
（連絡先）実行委員会事務局長 目代邦康 mokudai(at)pro-natura.jp

（財）自然保護助成基金

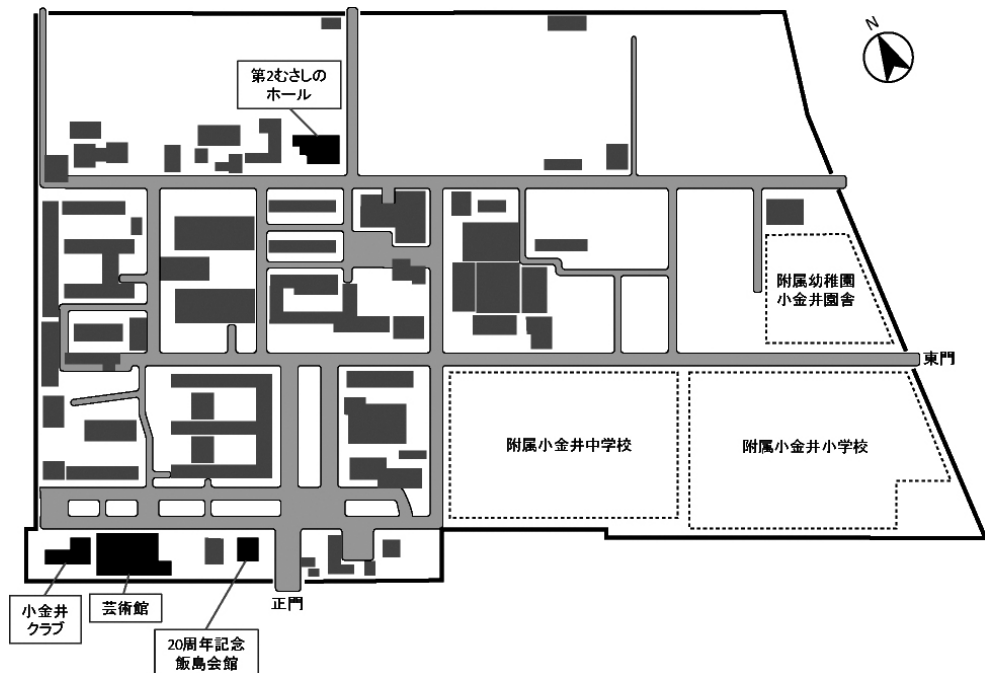
〒150-0046 渋谷区松濤 1-25-8 松濤アネックス 2F

tel. 03-5454-1789 / fax. 03-5454-2838

○東京学芸大学へのアクセス



○会場周辺地図



○宿泊

東京都内には多くのホテルがありますので、宿泊の予約は各自でおこなってください。

◆ 2009 年度 日本第四紀学会学会賞・学術賞 受賞者講演会（第 2 回） のお知らせ（再掲）

日本第四紀学会では、第四紀学の発展に貢献し顕著な業績をあげ、また学会活動に貢献した会員に授与される「学会賞」と、第四紀学に貢献した優れた学術業績をあげた会員に授与される「学術賞」を設け、大会時に受賞者を発表し、第四紀通信でご紹介しています。

第 2 回講演会を下記のとおり開催します。参加無料、事前申込不要です。会員・非会員を問わず、多数のご来場をお待ちしております。

なお、当日午後は同じ会場にて日本第四紀学会主催の地学教育に関するシンポジウムが開催されます。あわせてご参加ください。

2009 年度 日本第四紀学会 学会賞・学術賞受賞者講演会（第 2 回）

- ・日 時：2010 年 6 月 19 日（土）10:00～11:30
- ・会 場：早稲田大学 22 号館 202 教室（JR 高田馬場駅より学バス「早大正門」行きで「西早稲田」下車徒歩 5 分、または地下鉄東西線早稲田駅下車徒歩 15 分）。国際会議場斜め向かい。北門の外側になります。

<http://www.waseda.jp/jp/campus/map.pdf>

・プログラム

10:00-10:05 あいさつ

10:05-10:45

小疇 尚会員（学術賞受賞者）「山岳地域・極地における氷河・周氷河地形に関する研究」

10:45-11:25

小野 昭会員（学会賞受賞者）「旧石器時代の人類活動と自然環境」

問い合わせ：日本第四紀学会事務局（本誌最終ページ参照）

なお、同日午後、同会場において日本第四紀学会シンポジウム「学校教育で地学は生き残れるか？：学会と教育現場との連携に向けて」を開催します。詳細は下記の記事をご覧ください。

◆日本第四紀学会シンポジウム

「学校教育で地学は生き残れるか？：学会と教育現場との連携に向けて」

日時：6 月 19 日（土） 13:00～18:00

場所：早稲田大学 22 号館 202 教室（上記記事を参照下さい）

主催：日本第四紀学会

共催：日本地学教育学会、日本理科教育学会（予定）、日本科学教育学会（予定）

後援：日本地質学会、日本地球惑星科学連合、早稲田大学教育・総合科学学術院

参加費：無料

参加登録：なし。当日会場にお越し下さい。

趣旨：持続的発展可能で安心・安全な社会の構築のためには、将来を担う児童・生徒の科学リテラシーの向上が必要不可欠である。平成 24 年度から高校理科が 3 科目必修となる一方で、現在の地学の履修率は低く、地学専門の教員も激減している。このような危機的な状況の中で、地学を教科として存続させ、履修率を上げるためには、学会が積極的に教育現場に働きかける必要がある。本シンポジウムでは、3 つの教育系の学会と共同で学校の教科教育を中心とする地学教育、理科教育、科学教育の現状と課題を整理し、学校現場と学会の連携

を図るための方向性を議論する。なお、本年8月の日本第四紀学会大会では、生涯教育としての自然史教育をテーマとしたシンポジウムを開催するので、そちらにもご参加下さい。

プログラム

13:00-13:05 趣旨説明 日本第四紀学会 産総研・植木岳雪

第1部 歴史と未来

13:05-13:25 戦後の日本の地学教育の流れ 甲南大学・林 慶一

13:25-13:45 新教育課程とこれからの理科教育、地学教育
文科省国立教育政策研究所・田代直幸

13:45-14:00 神奈川県における理科教員の採用について
神奈川県教育委員会・中野真理

第2部 現状と課題

14:00-14:20 原体験・ものづくりを通して生活と地学のつながりを考える
日本地学教育学会 京都教育大学・中野英之

14:20-14:40 地学領域をめぐる諸問題 日本理科教育学会 愛知教育大学・遠西昭寿

14:40-15:00 科学教育で大切なこと 日本科学教育学会 講演者調整中

休憩 10分

15:10-15:25 梶ヶ谷の大地を探る子どもたち ～小学校理科（地学）への私見～
川崎市立川中島小学校・渡邊正人

15:25-15:40 中学校の教育現場から見た地学教育について
東京都江戸川区立小松川第二中学校・高橋和光

15:40-15:55 高校地学の開講に向けて ー専門外教員から敬遠されていた理由と対策ー
埼玉県立深谷第一高等学校・宮嶋 敏

15:55-16:10 大学の教員養成課程からみた地学教育・理科教育・科学教育の現状と課題
岡山大学教育学部・宇野康司

16:10-16:25 大学入試科目としての高校地学
秋田大学教育文化学部・川村教一

第3部 学会と教育現場との連携に向けてできること、すべきことは何か？

16:25-16:40 魅力的な教材開発・アウトリーチ活動を通じた地球惑星科学と理科教育の連携
日本理科教育学会 岐阜大学教育学部・川上伸一

16:40-18:00 (80分) 総合討論

コメント

日本地学教育学会 茨城大学教育学部・牧野泰彦

日本科学教育学会 コメンテーター調整中

日本地球惑星科学連合 神奈川県私立聖光学院高校・畠山正恒

日本地質学会 新潟大学教育学部・藤林紀枝

日本第四紀学会会長 日本大学文理学部・遠藤邦彦

議論

なお、2009年度学会賞・学術賞受賞者講演（5ページ参照）が午前中に開催されます。こちらにもご参加下さい。

学術賞 小疇 尚（明治大名誉教授）10:05-10:45

「山岳地域・極地における氷河・周氷河地形に関する研究」

学会賞 小野 昭（副会長、明治大特任教授）10:45-11:25

「旧石器時代の人類活動と自然環境」

◆日本第四紀学会講習会「地形と地層を見る目を実験で磨こう」参加報告

川村教一（秋田大学教育文化学部）

2010年3月8日に、東京学芸大学環境教育実践施設にて、元筑波大学陸域環境研究センターの池田 宏さんを講師として標記の講習会が開かれ、32名の研究者、技術者や学生らが参加しました。講習会に参加した学生の一人によると、「山や川に対する興味が高まり、地形の成因について考えるようになりました」とのこと。ここでは、講習会での小型実験装置を活かした実験の内容を簡単に紹介します。

まず最初のテーマは、「マッターホルンと富士山」です。

傾斜角 60° 、風景写真などでおなじみのマッターホルンの先鋒。あれは崩落する岩片が磨いた岩肌だといいます。講習会の冒頭からいきなり意表を衝かれる話題です。そして富士山の山頂部から山麓までの傾斜角の違いに、きちんとした理由があるとは。富士山を単純に成層火山で片づけてきた、自分の地形を見る目のなさが恥ずかしいです。

2番目のテーマは「岩川と石川」です。まず、このような実験から始まりました。河床を構成する物質が礫の場合と、そこに砂を流した場合とを比べたとき、流速が速いのはどちらでしょうか？正解は後者です。川に大石が見られるから流速が速いわけではありません！河川に見られる礫が下流ほど小さくなるのは、小学校や中学校の理科では礫が運ばれて摩擦するからと教えていますが、池田さんによると真相は、侵食性の河川では石が風化するから。一方、堆積性石川では、礫と砂が混ざって起こる「混合効果」によって、礫が砂よりも運ばれやすくさえなるといいます。講習を受けながら、野外で地形を見る目を曇らせてはいけないと思い始めました。

3番目のテーマ「石川・砂川の波立つ流れ

（アンティ・デューン）と石川や雪崩斜面や海底谷の階段地形」です。アンティ・デューン（反砂堆）は、強い水の流れて生じると教科書に書いてあります。しかし、実験水路に流す砂を減らしてもアンティ・デューンは生じることを、今回の実験で目の当たりにしました。別の実験では段々滝の形成を見せていただきました。河床の礫がない急勾配の川において、全体の勾配が小さくなる過程で階段状の滝が生じるのだといいます。

講習会の残り時間が少なくなってきました。いよいよ、最終テーマの「比較の目（地理の目）と時間の目（歴史の目）を磨こう」になりました。実験用水槽の一端の水面で木柱を上下させて波を起こし、他方の端にしつらえた礫浜と砂浜に波をぶつける実験です。礫浜と比べて砂浜では波のエネルギーが消耗することを確かめられました。そして、プラスチックトレーと砂だけでできる、ミニリップルと斜め交錯模様の実験です。

「フィールドへ行きましょう。実験を楽しんで、ますますフィールドへ行きたくなりますよ！」講習会テキストに記された池田さんの言葉です。小生も早速、野外に行きたくなりました。職場に戻って池田さんが執筆された『地形を見る目』を早速図書館から借りて、あらためてじっくりと学んでいます。この本が現在のところ絶版になっているのは残念です。

本行事は時間が大変短く感じられ、実りの多い、示唆に富む内容の講習会でした。最後に、常に笑顔で楽しい雰囲気一杯で解説してくださった池田さんと、実験助手を務められた奥様、そして本講習会実施にご尽力下さった関係各位に御礼申し上げます。



講習会終了後の集合写真（後ろ右から5人目が池田先生、6人目が奥様） 撮影者：寒河江景子（駒澤大学）

◆日本第四紀学会講習会（関西地区）のお知らせ（第1報）

- (1) 講習会タイトルと講師
「沖積層：その堆積物・堆積システム・堆積シーケンスの解析法の基礎」
増田富士雄（同志社大学）・石原与四郎（福岡大学）・佐藤智之（産総研）・谷口圭輔（同志社大学）・高田将志（奈良女子大学）
- (2) 日程：2010年9月9日（木）午後1時（開始）～11日（土）（午後4時解散）
- (3) 集合・開催場所：同志社大学京田辺校地（〒610-0394 京田辺市多々羅都谷 1-3）
- (4) 講習会概要：講義と実習を通して、地表地質の解析法の基礎を学ぶ。
 - 1) 講義：堆積相解析、シーケンス層序学、沖積層解析の今後
 - 2) コアや水路実験や自然露頭での堆積物の観察、柱状図の作成
 - 3) ボーリング柱状図での堆積相解析法やシーケンス層序解析の実習
- (5) 参加費：資料代等約3000円（予定）
- (6) 定員：30名
- (7) 問合せ・申込先：
電子メールで高田将志（奈良女子大学・文学部；takada(at)cc.nara-wu.ac.jp）まで。電子メールの件名を「第四紀学会講習会申込み（氏名）」とし、本文中に、1) 氏名、2) 所属、3) 電子メールアドレス、4) 連絡先住所、5) 連絡用電話番号、を明記してください。申込みされた方には、申込み受け完了の返信メールをお送りします。
- (8) 申込締切：2010年7月31日（土）。ただし、先着順で定員になり次第、締切らせていただきます。

◆国立環境研究所公開シンポジウム案内

『4つの目で見守る生物多様性－長い目、宙（そら）の目、ミクロの目、心の目－』

国立環境研究所では、毎年6月の環境月間にあわせて公開シンポジウムを開催しています。今年は、東京及び京都において、「4つの目で見守る生物多様性－長い目、宙の目、ミクロの目、心の目－」をテーマに、生物多様性の保全にかかわる当研究所の研究の一端をわかりやすくご紹介します。

○東京会場

開催日時：平成22年6月19日（土）12:00～17:00

開催場所：九段会館ホール（千代田区九段南1-6-5）

アクセス：地下鉄東西線・新宿線・半蔵門線「九段下駅」4番出口より徒歩1分
JR飯田橋駅より徒歩10分

○京都会場

開催日時：平成22年6月26日（土）12:00～17:00

開催場所：シルクホール（京都市下京区四条通室町東入ル 京都産業会館8階）

アクセス：京都市営地下鉄烏丸線四条駅・阪急京都線烏丸駅より徒歩3分

参加登録が必要です。詳細は以下のホームページを参照ください。プログラムも掲載されています。 <http://www.nies.go.jp/sympo/2010/>

◆日本第四紀学会 法務委員会規定

(2009年8月28日、評議員会にて決定)
(2010年1月31日、評議員会にて一部改正)

(目的)

第1条 本規定は、日本第四紀学会会則第6条4、第14条の1に基づき、会員による研究結果の捏造・改ざん・盗用、研究費の不正使用等の不正行為等に適切に対処するための組織、申し立て及び除名等に関する手続き及び権限等について規定するものである。なお、不正行為等の判断は、日本第四紀学会倫理憲章のほか日本学術会議による「科学者の行動規範」を基準とする。

(法務委員会の設置)

第2条 本会に、第1条の目的のための法務委員会を常設する。

2 法務委員会は、常任委員、臨時委員および法務委員会事務局から構成される。常任委員は会長が推薦し、評議員会の承認を受けた5名の正会員からなる。常任委員の互選により法務委員長を選任する。常任委員の任期は2年とし、再任を妨げない。臨時委員は審理の必要に応じて選出され、会長が推薦し評議員会の承認を受けた、正会員及び法律の専門家などの外部委員併せて4名以上とする。任期は2年以内とし、会長が委嘱する。評議員会は、任期途中であっても正当な理由があれば常任・臨時委員を解任することができ、その場合には委員を速やかに補充する。法務委員会事務局は法務担当副会長1名、法務担当幹事1名から構成され、副会長を責任者とする。

3 法務委員会委員長は、委員会の承認を得て、関係者（会員以外を含む）の出席を求めることができる。

(人権の尊重)

第3条 法務委員会におけるすべての手続きは、関係者の人権を最大限尊重して行うこととする。

(守秘義務)

第4条 法務委員会構成員及び委員会に出席した、あるいは事情を聴取された関係者は、本規定による調査及び審理等により知ることのできた秘密を漏らしてはならない。

(不正行為等の疑いの申し立て)

第5条 会員に不正行為等の疑いがあると思料する者は、原則として自分の氏名を明らかにした上で、書面にて窓口である法務委員会事務局に申し立てを行うことができる。

(調査)

第6条 申し立てがあった場合には、法務委員会は速やかに申し立て内容が事実であるかどうかを調査しなければならない。

2 調査にあたっては、次の事項を行うことができる。

- (1) 関係者からの聴取
- (2) 関係資料・研究資料等の調査
- (3) その他調査に必要な事項

3 会員である関係者は、法務委員会の調査に対して、誠実に協力しなければならない。また法務委員会から資料の提出を求められた場合には、これに応じなければならない。

(調査報告)

第7条 法務委員会は、申し立てに対する調査結果を、幹事会及び評議員会に報告するとともに、申し立て者ならびに被申し立て者に通知しなければならない。

(追加調査及び審理)

第8条 不正行為等が存在すると思料される調査結果が出された場合には、評議員会は法務委員会に臨時委員を追加選出し、法務委員会で審理を行うとともに、必要に応じて追加調査を行う。

(裁定)

第9条 法務委員会は、最終的な調査結果に基づき、不正行為等の有無及び程度、ならびに必要な措置について審理し裁定を行って、その結果を幹事会ならびに評議員会に報告する。

2 裁定は、常任委員及び臨時委員総数の3分の2以上の議決により決定することを原則とする。

3 裁定を行うに当たっては、被申し立て者には書面あるいは口頭による弁明の機会を与えなければならない。

4 不正行為等を行った会員への措置は、程度や役職に応じて次のとおりとする。除名、

期間を定めた会員資格の停止、役員解任、期間を定めた役員資格の停止、そのほか不正行為排除のために必要な措置。

- 5 不正行為等が無かったとする裁定結果については、申し立て者ならびに被申し立て者に通知しなければならない。

(措置)

第10条 会長は、法務委員会の裁定にしたがい、不正行為等を行った会員に措置を通告しなければならない。

- 2 裁定結果と措置の内容は、個人情報または知的財産の保護等不開示に合理的な理由がある部分を除き、原則として公表する。公表事項について被申し立て者の意見がある場合には、その意見もあわせて文書により公表するものとする。

(申し立て者及び調査協力者の保護)

第11条 不正行為等に関する申し立て者及び調査協力者に対しては、申し立てや情報提供を理由とする不利益を受けないように十分な配慮を行う。

(被申し立て者の名誉回復措置)

第12条 裁定と措置を公表した後、不正行為等が存在しなかったことが確認された場合には、会長は被申し立て者の名誉回復のために、十分な措置をとらなければならない。

(関係機関との連絡協議)

第13条 法務委員会は、必要に応じて、外部の機関と情報交換等の連絡協議を行うことができる。

(啓発活動)

第14条 法務委員会は、行動規範の遵守を促すために、会員の倫理教育を含む啓発活動を行うものとする。

(規定の変更)

第15条 本規定の変更は、評議員会の議決によるものとする。

附則1 日本第四紀学会法務委員会事務局は東京都新宿区大久保2丁目4番地12号ラムダックスビル10階(〒169-0072)に置く。

附則2 本規定は2009年9月1日より施行する。

◆ 2009年度日本第四紀学会 第5回幹事会議事録

日時：2010年4月10日(土) 13:00～18:00

場所：早稲田大学16号館1029教室

出席：遠藤、小野、竹村、百原、植木、苅谷、久保、佐藤、須貝、三田村、吾妻(オブザーバー) 町田、奥村(事務局) 中野

議事：

1. 前回幹事会以降の活動状況を各担当から報告した。
2. 後援依頼3件を承認した。
3. 6月19日(土)に開催する評議員会、学会賞・学術賞受賞者記念講演会・シンポジウムの会場および進行を検討した。

4. 2010年学術大会の開催準備について検討した。ポスター発表のショートサマーリーは行わないこととした。また、2011年度以降の開催候補地について提案があった。

5. 6月および8月に開催されるPAGES関係のシンポジウムについて、学会からも広報活動を展開することが確認された。

6. 功労賞受賞者の選考を行なった。

7. 学会会員名簿の作成について、今後のスケジュールを検討した。

8. 専門分野・役員選挙方法検討委員会の設置について検討した。

9. 次回の幹事会は6月19日(土) 9:30～10:00に開催。次回は7月24日(土)に開催予定。

◆ HOKUDAN International Symposium on Active Faulting 2010 報告

京都大学理学研究科 堤 浩之

1995年(平成7年)に発生した兵庫県南部地震によって、淡路市北西部の旧北淡町などが多大な被害を被った。この地震の5周年にあたる2000年に、活断層研究の発展と地震被害の軽減を目的とする北淡国際活断層シンポジウム2000が開催された。以後5年

おきに開催されてきたこの国際シンポジウムは、今回で第3回を迎えた。北淡国際活断層シンポジウム組織委員会・実行委員会(委員長：中田 高)を主催者として、淡路市、淡路市教育委員会、日本活断層学会、産業技術総合研究所活断層・地震研究センター、南カ

リフォルニア地震センター、IGCP 567 考古地震学 Project の共催、兵庫県、兵庫県教育委員会、日本学術会議、日本第四紀学会、日本地震学会、日本地理学会、東京地学協会、日本地すべり学会、日本応用地質学会、国際第四紀学連合古地震グループの後援、関西地質調査業協会、(株)ほくだんの協賛により、2010年1月17日から21日まで、北淡震災記念公園セミナーハウスを中心に実施された。今回は、海外11カ国から29名と国内から約170名の参加者があり、シンポジウムは盛会裏に行われ、所期の目的を達成することができた。記して関係各位に感謝の意を表する。

シンポジウム初日(1月17日)の普及講演会では、会場を埋めた約200名の聴衆に向け、尾池和夫・伊藤和明・Robert S. Yeatsの3氏が、地震災害とその対策などについて講演し、その後市民と研究者の交流集会を行った。

2～4日目(1月18～20日)に行われた科学セッションでは、“Forecasting large earthquakes from active faults in time and space”というテーマのもと、幅広い分野の研究者が集い、活断層・地震から地震工学・防災に至るまで多岐にわたる議論を行った。

口頭発表セッションは毎日9時から18時近くまで行われ、発表は計37件(うち海外参加者19件)で、すべて招待講演であった。各講演者には、質疑応答も含め30分の講演時間が割り当てられ、各講演とも丁寧な導入から始まり、専門外の方の講演でも理解しやすかった。一般参加者の発表はすべてポスター発表であり、計40件が展示された。

18日は、“Paleoseismology and archaeoseismology”セッションが開かれ、世界各地での活断層・古地震・地震考古学研究が紹介された。特にトレンチ調査については、異なる気候・テクトニックな環境下での事例が数多く紹介された。海外の事例では、断層活動の長期間の記録を欠落なく解読するための調査戦略が参考になった。国内のトレンチ調査については、個々の活断層の最新活動の時期や過

去数回の活動の間隔に関するデータは蓄積されているものの、断層活動の普遍的モデルの構築に資するようなデータとしては、質・量ともに不足していると感じられた。地震考古学は、各国(地域)の歴史や文化の違いに起因した多様な研究が行われていることがわかった。またその多様性ゆえに、地震イベントの認定基準等も地域によって異なるという印象を持った。

19日は“Tsunami and submarine faults, earthquake-triggered mass movements, new techniques in active fault research”セッションが開かれた。津波に関しては、2004年スマトラ地震以降の海溝型巨大地震に関する研究のレビューや南海・相模トラフの巨大地震に伴う津波堆積物に関する研究が紹介された。海底活断層に関しては、日本・カリフォルニア・トルコの事例が紹介された。海底地形のレーザー測量や反射法地震探査技術の進展により、海底活断層に関する知見が著しく増大していることが実感できた。新しい調査技術に関しては、航空レーザー測量や地上レーザー測量による断層変位地形の解析や合成開口レーダーを使った2007年新潟県中越沖地震に伴う活褶曲の成長などが紹介された。特に、近年技術革新の著しいレーザー測量については、参考になる発表が多かった。Ramon J. Arrowsmith氏(アリゾナ州立大学)は、サンアンドレアス断層の航空レーザー測量データを使って、谷の屈曲量を従来とは比較にならない精度・密度で計測した事例を紹介した。丸山正氏(産業技術総合研究所)は、2008年岩手・宮城内陸地震の地震断層の地上レーザー測量の結果を紹介した。地震断層は、出現後すぐに侵食・崩壊・人工改変が始まるので、このような測量データはデジタルアーカイブとして有用であると感じた。地震で誘発された地すべりについては、2005年カシミール地震や2008年岩手・宮城内陸地震を主な例とした地質学的な研究や数値シミュレーションに関する講演が行われた。

20日は“Earthquakes and their forecasts, strong motion”セッションが開かれた。この



シンポジウム参加者の集合写真(中田 高 撮影)

セッションでは、主に測地学・地震学・工学分野からの講演が行われ、さらには保険業界の視点からも地震がとりあげられた。カリフォルニアや日本を事例とした地震予測研究やハザードマップ作りの現状が紹介され、地震研究の2大先進国間の相互理解が進んだものと思われる。また我々が収集した活断層データが、いかにして防災に役立つデータに加工され、社会に発信されているのかが理解できた。このセッションは、通常の学会ではまとめて聞くのが困難な多彩な講演から構成されており、大変有意義なセッションとなった。

21日には、あいにくの小雨模様ではあったが巡検が行われ、E-Defense や六甲山周辺の活断層地形を見学し、活断層や地震災害軽減について具体的に議論した。

科学セッション中の3日間は、朝から夕方まで会場に缶詰になって、多岐にわたる分野

の最先端の講演を聴くことができた。海外参加者にとっても、日本で行われている活断層・地震研究を知るよい機会であったと思われる。レセプションでのスピーチや個人的に話した範囲では、日本の活断層・地震研究のレベルの高さが十分に認識され、有意義なシンポジウムであったと受け取って頂いたようである。ポスターセッションでは、参加者の多様なバックグラウンドを反映した幅広い分野の発表がなされ、国内外の調査・研究に触れる良い機会となった。特にポスターセッションのコアタイムは設けられなかったが、休憩時間ごとに、飲み物を片手にポスター前で議論する光景が見られた。日本の若手研究者が、自分の研究を海外参加者に一生懸命説明している光景が随所に見られ、次世代研究者の育成にも一役買ったものと思われる。

◆ 第18回国際第四紀学連合大会の案内

XXVIII INQUA Congress (第18回国際第四紀学連合大会)は、2011年7月20日～27日にスイスのベルンで開催されます。現在までに大会プログラム委員会(LOC)が組織され、大会でのセッション提案が公募されています。以下のホームページより提案の手順を参照のうえ、2010年6月30日までに詳細な提案をプログラム委員会まで送付してください。なお、下記にありますように、アブストラクト提出や旅費補助申請の期限が2010年9月30日と予告されていますのでご注意ください。

<http://www.inqua.tcd.ie/bern2011/spc01.html>

上記ホームページでは、ベルン大会に関する各種重要日程が示されていますが、これらは今後変更になる可能性があるため、INQUA および Bern 大会組織委員会のホームページで随時確認をしてください。日本第四紀学会メーリングリスト等でも最新情報を随時お伝えします。

<現在示されている日程(2010年4月30日現在)>

The following (approximate) deadlines have been set: -these may be subject to some change by the Local Organising Committee (LOC).

2010年4月30日 : List of potential sessions placed on web and available generally as invitation to all.

2010年6月30日 : Final session proposals deadline. The Scientific Programme Committee will then consult to decide which of these go forward.

2010年7月4日 : Sessions uploaded to web and a general invitation for abstracts will be issued. All approved sessions will be issued with session code numbers.

2010年9月30日 : Abstract submission deadline. Deadline for applications for INQUA financial support.

2010年10月21日 : Convenors chose abstracts, and decide whether each one is an oral presentation or a poster presentation.

2010年10月31日 : Participants are notified whether their abstract is accepted, and whether it is oral or poster.

◆ CALL FOR NOMINATIONS TO THE TWO INQUA MEDALS

INQUA では以下の顕彰受賞候補者を募集しています。締め切りは本年 7 月 31 日です。詳細は、INQUA ホームページ <http://www.inqua.tcd.ie/medals.html> を参照下さい。

• The Sir Nicholas Shackleton Medal for outstanding young Quaternary scientists (closing date 31/07/2010)

INQUA has established the Sir Nicholas Shackleton Medal in recognition of the many contributions of Nick Shackleton, a giant in the field of Quaternary science. The medal will be awarded once every four years to an outstanding young Quaternary scientist, chosen by his or her peers and evaluated by a blue-ribbon committee of distinguished scientists. The medal, INQUA's first, honours Nick's distinguished career in Quaternary geochronology and paleoclimatology, which spanned 40 years and was based on isotopic studies of deep-sea sediment. Shackleton was showered with honours by his peers and the wider scientific community, thus a medal in his name seems appropriate and necessary. Nick served INQUA for 12 years, first as a Vice-President, then, from 1998 to 2003, as President, and most recently as Past-President.

• The Liu Tungsheng Distinguished Career Medal for distinguished service to the international community in Quaternary science (closing date 31/07/2010)

INQUA is pleased to announce the inauguration of the Liu Tungsheng Distinguished Career Medal. Professor Liu was a member of the Chinese Academy of Sciences and a research professor at the Institute of Geology and Geophysics, Beijing, China. He has been recognized by awards from numerous international and national organizations for his paleoenvironmental research on Chinese loess sequences.

◆ 日本第四紀学会テフラ・火山研究委員会ワークショップ開催報告

「ワークショップ：日本のテフラ研究－自然史・人類史の高精度編年とテフラの役割、Active Tephra 2010 in Kyushu に向けて－」

日本第四紀学会テフラ・火山研究委員会は、2010 年 1 月 9 日（土）に「ワークショップ：日本のテフラ研究－自然史・人類史の高精度編年とテフラの役割、Active Tephra 2010 in Kyushu に向けて－」を日本大学文理学部図書館 2 階オーバルホールにて開催しました。これは 2010 年 5 月、南九州霧島市において開催する「火山灰編年・環境変動・火山活動・人間活動に関する国際野外集会およびワークショップ "Active Tephra 2010 in Kyushu"」の国際野外集会にむけた日本国内におけるテフラ研究のレビューです。自然史・人類史の高精度編年とテフラの役割をテーマとし、マリンテフラ、古環境復元、火山学、考古に関わる日本のテフラ研究を展望しました。28 名の参加者があり、各発表の時間は、質疑応答を含めると 50 分以上から 1 時間半に及ぶ場合があり、深い議論ができたと思われまます。

以下は当日おこなわれた講演の題目と講演者です。

シンポジウム趣旨説明

青木かおり（立正大）：日本列島周辺における海域のテフラ層序と酸素同位体比層序

池原 研（産総研）：日本列島周辺における海洋と陸域を結ぶテフラ研究とその応用－古環境復元、年代、今後の課題－

中川光弘（北海道大）：テフラのカルデラ火山研究への応用：大規模噴火推移の復元とマグマの多様性

森脇 広（鹿児島大）：Kyushu-INTIMATE に向けたテフラ研究－古環境復元－

公文富士夫（信州大）：堆積物に基づいて古気候資料を統合するにあたっての指標テフラ研究への期待

出穂雅実（首都大）：日本列島の自然環境と人類－ OIS3 の旧石器研究からみた古環境・テフラ研究への要望

（記録 鈴木毅彦）

◆環境考古学会(The Association for Environmental Archaeology (AEA) Annual Conference) 案内

「環境考古学」という分野が、1980年に「環境考古学事始」(NHK ブックス：安田喜憲)という本ではじめて日本で紹介されてから30年がたちます。それを記念しての国際環境考古学会を日本で開催することとなりました。また、この学会自体も発足から30年目を向かえましたが、アジアでは初めての開催となります。今までは主にヨーロッパでの開催であったため、アジア人の参加は毎年少なく、この機会に日本を含むアジアからの多くの研究者の参加を期待しています。

日時：12月1日～2日(会議のみ。エクスカージョン別。)

会場：国際日本文化研究センター(京都市西京区)

<http://www.nichibun.ac.jp/welcome.htm>

テーマ：環境と文明：過去、現在、未来(the Environment and Civilization: Past, Present and Future)

近年、環境考古学の分野は手法、考え方共に大きく発展しています。特に、地球温暖化問題に関連して、未来予測、現在の評価、将来のプランなどのために、過去の環境について研究することはますます重要となってきました。環境考古学は、様々な環境問題を扱うにあたって、過去をもとにして予測・評価することに大きな役割を果たしています。どのような環境下で農業は発達したのか、どのようにして人間活動は周辺環境を変化させていったか、どのような環境変化が古代文明を崩壊させたか、どのように過去の帝国や王国が環境を変化させ滅亡したか、どの程度まで歴史的な出来事が環境に影響を与えたか、という質問に答えることは、現在、未来の環境問題を解決する重要な鍵となると考えられます。

このテーマに限らず、広く考古学、自然科学の分野の発表を募集しています。口頭発表、ポスター発表、どちらも歓迎です。

詳細はAEAのウェブサイト(<http://www.envarch.net/>)に掲載されています。

発表申し込み締め切り：2010年7月31日

問い合わせ先：国際日本文化研究センター安田研究室

(電話：075-335-2150; e-mail: [junkokit\(at\)nichibun.ac.jp](mailto:junkokit(at)nichibun.ac.jp) または [Yangtze\(at\)nichibun.ac.jp](mailto:Yangtze(at)nichibun.ac.jp))

◆第54回粘土科学討論会の案内

主催：日本粘土学会

共催：日本第四紀学会ほか

期間：平成22年9月6日(月)～8日(水)

会場：名古屋大学IB電子情報館

詳細は日本粘土学会のホームページをご覧ください。

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/cssj2/>

◆ PAGES 第 1 回 Asia 2K Workshop 案内

IGBP/PAGES では、世界中で並行して進めている、過去 2000 年間の気候変動に関するデータの取りまとめに向けた、

PAGES 2K Initiative <http://www.pages-igbp.org/science/last2millennia.html>の一環として、下記の日程で「第 1 回 Asia 2K Workshop」を開催いたします。

このワークショップは、世界全体と比べて、取り組みが少し遅れている、アジア地域での過去 2000 年間の気候・環境変動に関して、IPCC-AR5 等を展望して、研究状況の交流を行うと共に、今後の研究の方向性を議論していく、初めての機会になると思われます。

日本を始めとして、アジア各国で、過去 2000 年間の気候変動の復元やデータの解析、モデリング等に携わっておられる（また、ご興味をお持ちの）多くの研究者の方々の参加をお待ちしております。

- ★日程 2010 年 8 月 26 日（木）～ 27 日（金）
- ★場所 名古屋大学 環境総合館 レクチャーホール
- ★口頭及びポスター発表を募集中です。
- ★発表申込締切 2010 年 6 月 30 日、アブストラクト送付メ切 同 7 月 31 日

詳細は PAGES ホームページ

<http://www.pages-igbp.org/index.html>

または下記担当者にお問い合わせ下さい。

Forwarding address: M. Sano (Secretariat) & T. Nakatsuka (Asia 2k Leader)

Grad. Sch. Env., Nagoya University

Furo-cho, Chikusa-ku, Nagoya 464-8601 JA

E-mail: sano.masaki(at)b.mbox.nagoya-u.ac.jp

nakatsuka.takeshi(at)f.mbox.nagoya-u.ac.jp

Fax: +81-52-789-3436

◆学生会員の皆さまへ「学生会員継続届け」提出のお願い

2000 年度から学生会員は、毎年在籍中であることを「学生会員継続届」として提出して頂くことになっています。

2010 年度（2010 年 8 月 1 日～ 2011 年 7 月 31 日）を学生会員として継続希望される方は、A4 判の用紙（様式自由・ワープロ使用）に、申請者の所属・学年・氏名・連絡先・指導教員氏名を明記のうえ、指導教員の署名または捺印を添えてお送りいただくか、有効期限が明記された学生証のコピーを **2010 年 7 月 31 日（土）までに日本第四紀学会事務局まで郵送してください。**本届が提出されない場合は、2010 年度第 1 回目会費請求時に、正会員会費にて会費請求がされますので、ご注意下さい。

なお、2009 年度から学生会員として入会された方も提出願います。

また、日本学術振興会特別研究員 (PD) や科学技術特別研究員などは通常会員となります。

問合せ・送付先：〒 169-0072 新宿区大久保 2 丁目 4 番地 12 号
新宿ラムダックスビル 10 階 日本第四紀学会事務局
E-mail: daiyonki(at)shunkosha.com
TEL: 03-5291-6231 / FAX: 03-5291-2176

提出方法：郵便に限ります。

★★★ 第四紀通信に情報をお寄せ下さい ★★★

第四紀通信の原稿は随時受け付けております。

広報幹事：荻谷愛彦 (kariya(at)isc.senshu-u.ac.jp) 宛にメールでお送り下さい。

第四紀通信は奇数月月上旬原稿締め切り、偶数月 1 日刊行予定としていますが、情報の速報性ということから、版下が完成した段階でホームページに掲載するよう努力しています。奇数月 15 日頃にはホームページにアップするようにしていますのでご利用下さい。

日本第四紀学会広報委員会 専修大学文学部環境地理学研究室 荻谷愛彦
〒 214-8580 川崎市多摩区東三田 2-1-1 電話：044-911-1014 FAX：044-900-7814

広報委員：越後智雄・糸田千鶴 編集書記：岩本容子

日本第四紀学会ホームページ <http://wwwsoc.nii.ac.jp/qr/index.html> から第四紀通信バックナンバーの PDF ファイルを閲覧できます。

日本第四紀学会事務局
〒 169-0072 東京都新宿区大久保 2 丁目 4 番地 12 号 新宿ラムダックスビル 10 階
株式会社春恒社 学会事業部内
E-mail：daiyonki(at)shunkosha.com 電話：03-5291-6231 FAX：03-5291-2176